２０１６年秋学期レポート
日本財団聴覚障害者海外奨学金事業
第１１期留学奨学生
山本芙由美

Gallaudet University
International Special Student Program

ギャロデット大学国際特別生として８月に入学してから、早いもので秋学期が終了しました。ギャロデット大学にはろうLGBTQ学生のためのリソースやサポートが充実していて、LGBTQA Resource Centerが学内にあります。このセンターは実にLGBTQに関連した多様なイベントを開催してくれているのですが、私自身、勉学だけでなく、サポートの現場とも関わりたいと思っていたので、その環境に満足しています。２０１６年に新しく就任した学長Roberta J. Cordano氏自身がレズビアンであることを公言しているため、学内において「性」の多様性がさらに啓発されるようになっています。その効果のひとつとして、今年８月、LGBTQA Resource Centerのコーディネーターである Cara Millerさんを含めた関係者の熱心な取り組みのおかげで、学内に「All Gender Restroom（全てのジェンダーのためのトイレ）」の配置が実現しました。まだ数に限りがあるものの、学内のすべてのトイレに配置実現を目指したいということでした。また、それぞれの学部でLGBTQがメジャーのクラスが新しく立ち上げられるようになりました。私自身、とてもタイミングのよい時期に入学できたと思っています。

秋学期ではLGBTQ、ジェンダー、セクシャリティーがメインのクラスを４つ履修しました。履修クラスについては以下の通りです。

【HIS381】*Gay and Lesbian History*　（ゲイとレズビアンの歴史）

歴史学部のクラスです。このクラスでは欧米を中心にLGBTQAの歴史について学びました。歴史のなかのSexuality Identity（性自認）、同性の関係、LGBTQAコミュニティーの発展、LGBQAへの権利や政治運動、HIV/AIDS、Post gay Queer Identity（構造主義におけるゲイ・クィアアイデンティティ）について触れなが

ら勉強しました。

古代から近世、近代、現代への時間的プロセスを読みとりながら、LGBTQA はどのように変わってきたのかを学ぶことができました。このクラスは大量の英語文献を読んで議論、レポートを書くスタイルでしたが、LGBTQA の歴史を学ぶことで今後の運動で何が必要かなどを客観的に考えることが可能となりました。また、あまり知られていないインターセックスの存在や彼らの歴史も学びましたが、彼らの生きてきた時代的背景、社会システム等によっては彼ら自身を修正（手術療法）しなければならない等、彼らの生きにくくさについて改めて勉強できました。

※インターセックス；外性器・内性器・内分泌系・性染色体など身体的な特徴が、男女に判別しづらい人の状態。医療的対応が必要な場合もある。当事者が知らない・知らされていない場合も少なくない。「インターセックス（半陰陽）」「性発達障害」「性分化障害」とも言われてきたが、2009 年に日本小児内分泌学会は総称を「性分化疾患」と統一。一方、「性別越境者」「性を超える人」と表現する人もいる。

【COM430】*Gender and Communication*（ジェンダーとコミュニケーション）

コミュニケーション学部のクラスです。このクラスは私たちが生きる社会における男/女の役割（ジェンダー）について学びました。生物学、教育、宗教、文化、家族、メディア、労働など様々な視点から、ジェンダーコミュニケーションについて調べたり、考えたりしました。また、フェミニズムの３つの波（リベラルフェミニズム、ソーシャル/マルクス主義フェミニズム、ラジカルフェミニズム）について学びましたが、それだけでなくセクシャリティーについてもたくさん取り上げられていました。

このクラスの議論の中で特に印象に残ったのは Visual Community（視覚的コミュニティー）である、ろうコミュニティーでその人の性自認をどう表現、他人に説明するかについてでした。現在、日本でもそのような議論があるので、それをクラスで紹介したら皆さん大変、興味を持ってくれました。

授業初日、自己紹介で先生が自分のことをレズビアンだと堂々と公言しました。これまでの留学生活で、ろう先生自身が LGBTQA だと公言するクラスを受けるのは初めてでした。

【SOC250】*Gender and Society*　（ジェンダーと社会）

社会学部のクラスです。社会学的な視点からジェンダーについて学ぶクラスでした。個人的レベルから政治的レベルまで、ジェンダー（男らしさ/女らしさ）がどのように形成し、社会化しているかについて学ぶことができました。

文化によって出てくるジェンダー差異という言葉もこのクラスで初めて知りました。例えば、リオオリンピックに参加した国の中で肌を見せてはいけないという文化があったり、男女がお互いに視線を合わせたりしてはいけないという文化があったりします。また、手話通訳者派遣で同性原則の国があったりします。

このクラスで一番印象に残ったのは"Just one of the guys?" Kristen Schilt 著、2010 年という本を読んで、その本を中心に Trans men について様々な視点から議論をしたことです。Schilt 先生はシカゴ大学の先生でジェンダー学を専門としています。彼女はカリフォルニア州からテキサス州に住む Trans men 65 名を対象に職場の経験についてインタビュー、フィールドワーク調査しました。それをまとめたのが、その本です。その 65 名の Trans men は年齢、Trans の種類（Trans gender, Trans sexual, 男装者など）、人種、性自認/性指向、居住地、仕事の内容、カミングアウトしているかどうか等、バックグランドがとても多種多様です。

インタビューでは、彼らの多くは Trans になる前にはレズビアンやクィアから始める人が多く、Trans の経過を知っている同僚がいたり、彼らの反応は様々です。データでは肌が白いほど教授や公務員などの高収入の仕事に就くことができ、黒人の場合、ギャングの世界に入る人もいるそうです。10 代から Trans を始める人たちはホルモン療法代、手術代を稼ぐためにブルーカラーの仕事に就くこともあるそうです。先生いわく、Trans woman は Trans man と比べて雇用や昇進の決定について不平等で、安定した生活を送ることが難しいケースが多いとのことでした。

また、実際にクラスでは Trans man 二名をゲストとして呼んでお話を聞いたり、二人ともカテゴリーとしては Trans ですが、性自認、性指向が違ったり、またトランスゲイとして男性と交際している人もいました。

※Trans men 女性として生まれ、性自認が男性の人（男性として生きる／生きたい人）

【SWK318】*Human Diversity*　（人間の多様性）

ソーシャルワーク学部のクラスです。学生に「多様性」への意識を高めるためのクラスです。ここギャロデット大学では、人種、民族、文化、言語、セクシャリティー、実に多様なアイデンティティをもつ多くの学生が在籍しています。このクラスを受講することで、それぞれがもつ個人的な固定概念、価値観を自分自身で分析、他者への理解が可能となります。

ディスカッション型のクラスですが、先生の授業への取り組み方や進行方法については大変、参考になりました。学生の多様なアイデンティティや文化的背景に気を使いながら、学生の発言を促したり、丁寧に解釈しなければならないからです。

また、日本ではなかなか思いつかないこともこのクラスで知ることができました。例えば、ひとりの学生がろう、アフリカンアメリカン、クィアゲイ、インテグレーション出身といように様々なアイデンティティをもつとします。その人のアイデンティティを説明するのに、ひとつのカテゴリーだけでは解釈しきれません。そして、どのクラスでもIntersection（交差）という言葉がよく使われていました。アイデンティティといえば、日本では 「重なる」イメージが強いのですが、Intersection（交差）という言葉を浸透させることで、様々な立場を可視化させることが可能になるのではと思っています。

秋学期が終了し、私自身、納得のできる成績をいただくことができました。英語面についてはチューターからのサポートのおかげで何とか乗り切ることができました。春学期も引き続き、勉学と支援現場を両立させながら頑張りたいと思っています。